

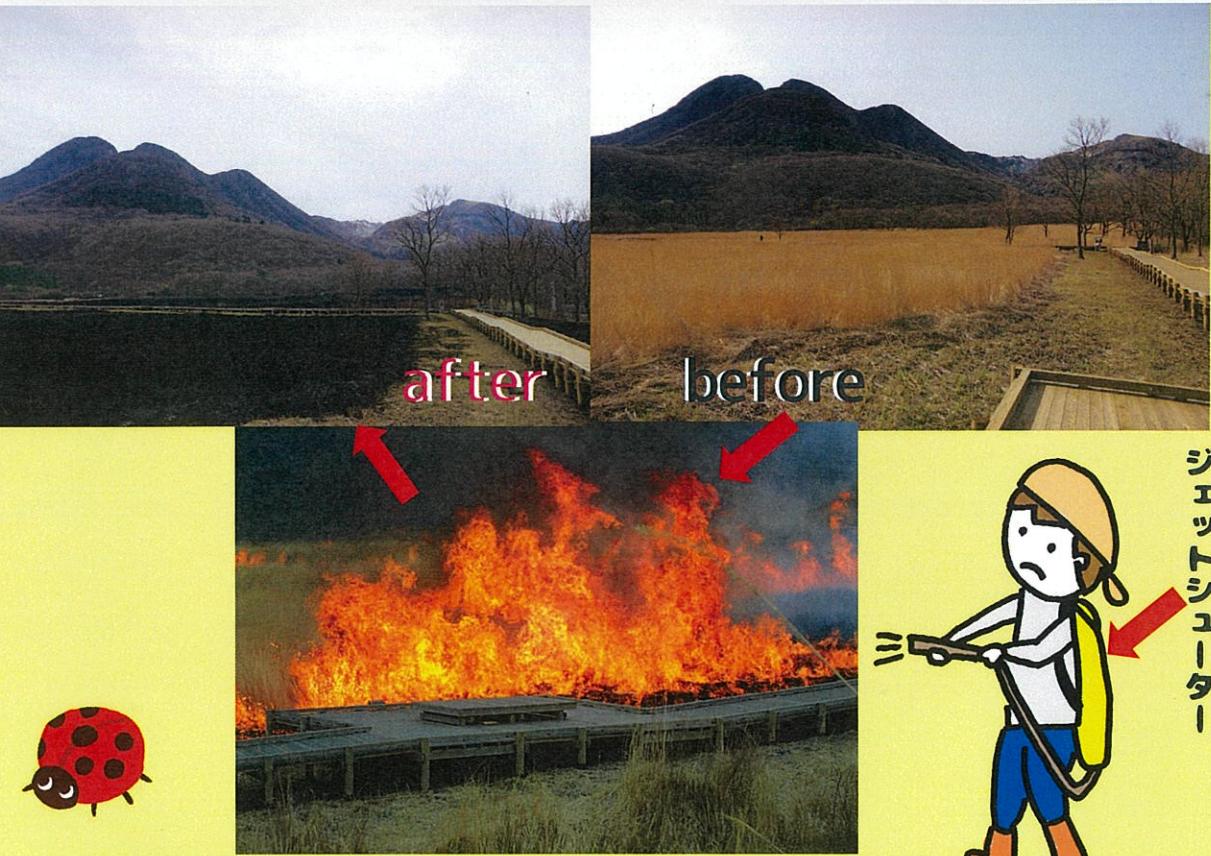
くじゅうの春の野焼き

くじゅうの春といえば野焼きです。黄金色の枯れ野原はあつという間に一面真っ黒になります。くじゅうでは「春は黒」という言葉があります。それはこの野焼きによって真っ黒に焼かれた「大地の色」と言われています。昔からくじゅうでは野焼きが行われていました。

そもそも何のために野を焼いたのでしょうか?

昔は牛や馬を放牧したり、牧畜のための飼料や家の屋根を作る材料として利用されていました。こうして野焼きを継続して行なうことが、生活をしていくうえでは当たり前でもあります。暮らしから守るために必要な作業でもありました。

今もなお続いている野焼きが行われなくなると、今後どのような変化が生じるのでしょうか?また必要とされる理由についても考えてみたいと思います。



野焼きに関わる人

野焼きは毎年多くの人達の力で行われているのをご存知ですか?

野焼き実行委員会を中心として、地元の自然保護団体、牧野組合、消防団、観光に携わる人などに加えて、ボランティアの人たちなど多くの人が関わって実施できます。単に枯れ野原に火をつければいいというわけではなく、火つけ役と呼ばれる人が、風の流れを読み的確に火をつけます。これも長年野焼きに関わっているからこそできることです。そして細心の注意を払って消していくます。また事故や怪我が起きてないよう、周りと協力して行なうことがとても重要になります。

こうして今後も多くの人たちが野焼きに関わっていくことにより、くじゅうの昔ながらの景観は守られています。そしてこれからは、「野焼き」という伝統を若い世代へと引き継いでいくことが必要になります。

野焼きのあとに咲く花々

タデ原では野焼き後にたくさんの植物が咲き始めます!なかでも代表的なのがキスミレ!

キスミレは小さくて可愛らしい花ですが、群生で咲くととっても目立つて黄色いお花畠のような景色が広がります! 泉水山周辺などでたくさん咲くので、春はドライブしながら楽しめます☆

ぜひ春は野焼き後のくじゅうでたくさんの植物を見つけてみてください!



ドライブしながら楽しめる キスミレスポット

地図で示している場所は、くじゅう連山周辺で気軽に見ることができるスポットです!

さらに詳しく!
消してしまって!

**① 森林になってしまった...
森林へと変化した場合、草原といふ環境でしか生きられない植物や生き物が姿を消してしまいます。「...」くじゅうの草原地帯では、たくさんの貴重な「植物」「動物」があります。そういうた草原にしかいない貴重な植物などの生息環境を守ることも、野焼きを行う大切な理由になります。**



☆野焼きをおこなわなくなつたら?☆

野焼きとは、枯れ野原に火を入れる作業のことと言います。時期は場所によつても違いますが、タデ原湿原や泉水山は3月下旬に行われることが多いです。野焼きは夏から秋にかけていくつかの準備をした後、3月の本焼きを迎えます。これを行なうことで防火帯周辺の草を刈り、刈った部分を焼くことで防火帯を作ります。これを行なうことで、3月の本焼きの際に、火の延焼を防ぐことができます。タデ原湿原では防火線切りを行つたあと、刈った草を寄せさせ作業を行い木道への延焼を防いでいます。



★野焼きの方法や行なう時期★

知りたい草原のハナシ

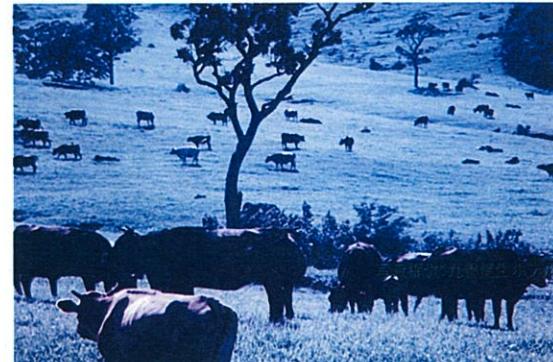
近年の日本で最も失われた景観は、「草原」と「湿原」だと言われています。草原と聞くと、どのようなイメージを持ちますか。阿蘇くじゅうの大草原には、異国情緒を感じる人も少なくないでしょう。かつて草原は日本人にとって生活のために欠かせないものでした。草原の草は、茅葺き屋根の材料や田畠の肥料、農耕に欠かせない牛馬の餌として、大切な資源でした。村や集落で管理され、守られてきました。日本は森の国と呼ばれるように、国土の約7割を森が占めます。その理由は温暖な気候と雨の多さ。木々が成長するにはこの上ない条件です。



『沓掛山展望台から眺める飯田高原』(写真提供:九重星生ホテル)
1960年代の様子。色が薄い場所が草原(原野)と思われます。



1960年代に入ると、草原に転機が訪れます。日本人の暮らしに変り始めたのです。石油燃料の登場によって、農業の機械化が進み、集落からは農耕用の牛馬が減りました。また、肥料としては化学肥料が普及し、屋根の材料も茅から瓦に変わるなど、人々の暮らしに草原が必要とされる理由がなくなっていました。一方、畜産業とのつながりで残ってきた草原もありましたが、それも飼料の輸入や牧草地への転換、高齢化による野焼きの停止などで、大きく縮小しました。明治・大正時代には、水田の面積(国土の9%)よりも広い草地(同11%)が広がっていましたが、現在では1%以下になり、日本からの草原の風景が消えようとしています。



泉水山の麓では牛の放牧がおこなわれていた。
現在は別荘地に変わっている



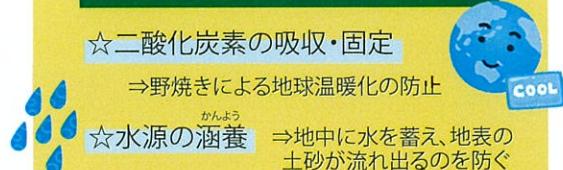
草原を守り、次世代に。なぜ、草原を守る必要があるのか

九重には「春は黒」という言葉があるように、野焼き文化が400年以上前から続いています。考古学では、日本では1万年前の縄文時代には野に火が入っていることが証明されています。しかし、縄文人が意図的に火をつけたのか、失火によるものかは定かではありません。人による草原の維持が歴史上明らかなのは、古墳時代以降。この時期から牛馬の放牧が始まり、草原が管理されるようになりました。中世には軍用馬の供給のために「牧」が開かれ、火を使ってシカなどの獲物を追い出す「焼狩」も行われました。そして、人口が1000万人を超える江戸時代頃には、盛んに採草が行われ草原が維持されたのです。



草原のもつ価値

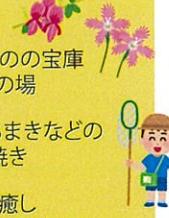
☆二酸化炭素の吸収・固定
⇒野焼きによる地球温暖化の防止



☆水源の涵養
⇒地中に水を蓄え、地表の土砂が流れ出るのを防ぐ

☆生物の多様性

⇒山菜や薬草の提供、生きものの宝庫
自然との親しみ・環境学習の場



☆伝統文化
⇒かしわ餅やちまきなどの食文化や野焼き

☆美しい風景
⇒心の安らぎ・癒し
観光・レジャーの楽しみ



昭和30年代の長者原。採草風景



飯田高原から由布院までつなぐ草原

●人の手による草原の歴史はいつ頃から?

約1万年前、火を使い始めた縄文人の時代からではないか、と言われています。
狩りのため? 焼き畑? その目的は不明です…

●火入れの時代を紐解くのは、土!?

草原で発達したと言われる「黒ボク土」。この土にはイネ科植物由来の成分や火入れによって生じたと思われる炭化物が含まれます。約1万年前から生成され、また黒ボク土以外の堆積物の成分からも過去1万年の間に火事が多発してきたことが明らかになっていることから、縄文人などによる火の使用が強く関与したのではないかと言われています。

●日本にもともと牛馬はいなかった!

牛や馬は古墳時代に大陸から日本へ渡来しました。奈良時代以降は、軍用馬などの育成で牧(牧場)が築かれ、また人々の生活でも牛馬は田畠を耕す存在として活躍し、彼らを飼育するためには草原=放牧地・エサとなる草が不可欠でした。牛馬が草原の維持に一役買っていたのです。

※写真提供:九重星生ホテル

●生き証人の草原の植物たち

今から1万年以前は、現在よりもずっと寒かったため海面が下がり、日本と大陸が陸続きでした。ロシアや中国の方から、動物や人間と一緒に植物も日本に渡ってきました。草原や寒い環境が好きな生きものにとっては、標高が高く、草原が維持されてきた九重は居心地がよかったです。今でも植物を中心にその生き残りを見ることができます。



北から南下してきたサワギキョウ

大陸からやってきたヒメユリ

●いまの草原のすがた

草原の草は牛馬のエサの他に、茅葺きの屋根材や田んぼの肥料、衣服の材料等として活用し、日本人の暮らしと密接に関わってきました。明治時代には国土の約10%が草原でしたが、近年は1%未満にまで縮小。戦後に牛馬からトラクター、茅葺きから瓦への転換、化学肥料の登場など、草原の資源を使う暮らしに激変し、価値を失った草原は森や宅地に変わってしまったのです。九重などの草原は、美しい景観だけでなく、野焼き文化や生きものたちを保全していくためにも貴重です。

①タデ原湿原

木道完備! 車いすOKのバリアフリー。
雄大な景色と四季折々の草花を楽しみながら散策できる。
隣りのビジターセンターで九重の自然情報も聞いてみよう



夏の草原は
草花の宝庫!

気軽に
楽しめる
九重の草原
4選

②おにぎり山

飯田高原最大級の草原が広がる泉水山の一角。青少年の家から、ここにぎり山を巻きながら山頂をめざす絶景ルート。山頂は草のひろば! ピクニックに最適



③一目山

九重スキー場の目の前!
山のてっぺんまで草が波打つ美しさには惚れ惚れ。
登山道を歩き、山頂からは阿蘇と九重連山が望める
パノラマビュー!!



④九重自然教室「さとばる」

手前味噌!? 九重ふるさと自然学校のちっさな草原は癒しの空間。草原の小径では、生きものと同じ目線で散策でき、夏はチョウの舞い、秋は鳴く虫のオステージ!